

# やまとの名品 天理図書館



## 「ほろほろと」ほくがさん 発句画賛

きりく 許六画 芭蕉賛

幅物 1 軸

縦32.0 cm 横52.8cm

「ほろほろと山吹ちるかたきのおと」は、芭蕉四十五歳（貞享五年・一六八八）の春、『笈の小文』の旅の折、奈良県吉野の花見に訪れ、川上村西河の滝のほとりにて詠まれた句である。

『笈の小文』には「西河」と題して載せられている。この句は本画賛の他に自画賛が存在するが、そちらは現在所在不明となっている。

右下の署名「芭蕉桃青」は芭蕉のことであり、「桃青」は芭蕉の俳号の一つ。「ほろほろと……」の句は芭蕉筆である。画者の許六は彦根藩の藩士。江戸詰の折（一六九二—一六九三）芭蕉に出会い、師弟合作にて本画賛を

完成させた。許六は、挿図

「奥の細道行脚之図」の画者でもある（『陽気』二〇〇七年十月号）。

本画賛は「鯉屋物」と呼ばれるコレクションの内の一点。

芭蕉の門人であり、庇護者でもあった杉山杉風の家の屋号を鯉屋といい、同家伝来の俳諧資料を屋号にちなみ「鯉屋物」と呼ぶ。散逸したのも少なくないが、芭蕉自筆の『野ざらし紀行』や『鹿島紀行』を含む、芭蕉と門人らの自筆資料など三十五点と、付属資料三点を現在、本館の綿屋文庫に所蔵している。

山吹は山中に生え、春に黄色の美しい花を付ける植物で、春



の季語。西河は吉野川上流のこ。急流で滝のように水が流れるところから、大滝ともいう。散り落ちる山吹の静けさと、流れ落ちる滝の荒々しさの対比が面白い。

遠山に滝を青く、山吹の葉は緑に、花を黄に淡く描き、滝の音で一重の山吹がほろほろと散る様を見事に描写し、句画一体の詩趣漂う俳画である。

（天理図書館 池谷 礼）